様式第２号

平成２８年度　　独 創 的 研 究 助 成 費 実 績 報 告 書

平成２９年３月３１日

<table>
<tr><td>申　請　者</td><td colspan="2">学科名</td><td>保健福祉学科</td><td>職 名</td><td>准教授</td><td>氏 名</td><td>池田　隆英</td></tr>
<tr><td>調査研究課題</td><td colspan="7">臨床的システム理論に基づく保育現場の課題に応えるカンファレンスの混合研究</td></tr>
<tr><td rowspan="3">調査研究組織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td colspan="2">所属・職</td><td colspan="2">専門分野</td><td colspan="2">役割分担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td>池田　隆英</td><td colspan="2">保健福祉学科 准教授</td><td colspan="2">教育学、社会学</td><td colspan="2">調査研究の企画、実施、分析、総括</td></tr>
<tr><td>分担者</td><td>楠本　恭之
岡田　典子</td><td colspan="2">岡山短期大学 准教授
山陽学園短期大学 講師</td><td colspan="2">教育学
教育学</td><td colspan="2">実地調査の補助、実地調査の分析・考察
実地調査の補助、実地調査の分析・考察</td></tr>
<tr><td>調査研究実績の概要</td><td colspan="7">研究代表者らは，本学特別研究助成費による「保育実践のフレームワークの基礎的研究」（平成23年度），「保育実践のフレームワークの理論的・実証的研究」（平成24年度），「子どもの理解と援助のフレームワーク」の汎用性・有用性の検討」（平成25年度），「「子どもの理解と援助のフレームワーク」を活用したアクションリサーチ」（平成26年度），「保育者の力量形成に向けたｅラーニング・プログラムの開発」（平成27年度）という一連の研究を行っており，「子どもの理解と援助のフレームワーク」（以下，「フレームワーク」）の理論的・実証的研究を行ってきた。
保育・教育の実践過程の研究は，研究者の個別の観点や実践者の個別の経験に基づく。その結果，実践過程を分析する「共通の枠組み」が構築される志向性が極めて薄く，実践が適切であると言える「実践の成立条件」を明示できていない。そのため，分析する際の「共通の枠組み」を構築し，「実践の成立条件」を実証的に検討する必要がある。一方，本研究は，保育・教育の実践過程を分析する「共通の枠組み」を提供し，「なぜ適切なのか」「なぜ成功なのか」といった「実践の成立条件」を明示できる。
こうした問題意識に立ち，上記の一連の実践的な研究成果があることから，かねてから現場での行政指導や講演活動において，「フレームワーク」研究の独創性が注目された。そのため，行政指導や講演活動の多くの依頼を受け，地域からの期待の声に応えるべく，本学の地域貢献の一環として活動を行ってきた。</td></tr>
</table>

調査研究実績の概要

本年度は，こうした地域貢献活動の延長として，幼稚園や保育所において保育カンファレンスを実施し，定量的方法と定性的方法を用いて，保育者自身が指導力量を分析する方法を実証的に検証した。

（1）カンファレンスのための「客観的指標」の作成

・「マトリクス」に基づき，定量的な調査結果を参考に，調査項目の選定を行い，保育者が実施すべき事項の「チェックリスト」を作成した。
・「フレームワーク」に基づき，定性的な調査結果を参考に，保育者が実践を振り返れるよう，対象理解の観点を組み込んだ「観察シート」を作成した。
・これまでの研究成果，保育現場での指導・助言や研修・講演を参考に，保育の基本的要素を網羅した「リーフレット」を作成した。

（2）「客観的指標」を用いたカンファレンスの実施

・「チェックリスト」を調査票として使用し，データを統計的に処理し，その分析結果を園に提供し，保育者の自己分析に活用した。
・実践をビデオ撮影したデータをもとに，「観察シート」によって分析し，その分析結果を園に提供し，保育実践の振り返りに活用した。
・「リーフレット」は，保育職務の全体像であるため，これをカンファレンスの「議論の道筋」として利用した。

（3）カンファレンスの検証と「分析事例集」の作成

・複数園のカンファレンスの結果を集約し，保育者が実践を振り返るための「事例分析集」を作成し，協力園や関係機関に配付し，ウェブ上で入手可能にした。
・今後は，複数年のデータに基づき，客観的指標を用いたカンファレンスによる変容過程を分析し，研究成果を協力園や関係機関に還元していく。

斬新性 チャレンジ性	臨床的なシステム理論 （本研究の理論枠組み）	フィールド・ベースの研究 （本研究における調査姿勢）	定量・定性による混合研究法 （本研究の裏付けとなる実績）
本研究の 構成要素	個人の力量 （職務）	力量を定量的に分析できる 「チェックリスト」	マトリクス （定量的研究）
	システム （個人と組織の媒介）	カンファレンスの道筋を示す 「リーフレット」	指導・助言 研修・講演
	組織の風土 （文化）	実践を定性的に分析できる 「観察シート」	フレームワーク （定性的研究）

※「チェックリスト」「観察シート」「リーフレット」は，これまでの研究成果を活用する。

（4）指導力量の分析と向上および保育現場への波及効果

従来，保育カンファレンスには「意見が噛み合わない」「結論が出ずに終わる」といった致命的な課題がことが指摘されてきた。一方，本研究では，「客観的指標を用いたカンファレンス」を行うことにより，こうした課題をある程度克服できることがわかった。「チェックリスト」によって自己分析ができ，「観察シート」によって対象理解を深める。そのうえで，「リーフレット」の道筋に沿って，保育者が同じ観点を共有して議論できる。本年度は，「リーフレット」のバージョンアップを行い，「事例分析集」を作成することもできた。今後，本研究の知見が県内外に波及する効果が着実に見込まれる。

成果資料目録

（1）子どもの理解と援助の「フレームワーク」（ver. 3）
（2）保育実践の事例分析集（定性的分析編）